頭がいいとは一体どういうこと？

W校　高等部二年一組

渡邉　慧

私はどちらかというと学校では成績がいい方だ。それはテストの点数やレポートカードに表示されているアルファベットを見ればすぐわかることだ。しかし、だからと言って私より低い成績をとっている生徒がバカだとは言えない。

私にはパトリックという友達がいる。彼は学年トップを競えるほどの頭脳と実力を備えている。だが彼の成績で言うと、学年上位に惜しくも届いていない。それはなぜか？確かに成績で見るのなら、私の方が「頭がいい」と言われるだろう。しかしそれは必ずしも真実とは限らない。学校では、「良い成績＝頭がいい」と言う考え方が主流である。だが、これは間違っている。いい成績を取るには、まず何が大切か？それは、暗記と応用である。いかにものを暗記し、頭の中に詰め込み、そ

れを吐き出して応用できるか。しかし、これで頭がいいと言えるのだろうか？目の前に出された数字と言葉を無理やり覚え、応用する。しかも、その応用にしてもどこかの教科書にきっちり書いてあるだろう。であるならば、学校の成績とは何なのだ？それは、一人の生徒がどれだけ特定の教科でものを覚えられるかだ。確かに、そのようなスキルは百年、二百年前の時代では重要だったかもしれない。言われた通りで機械を動かし、プロダクトを大量生産する。だが、今の時代では古すぎる評価基準であり、とても頭の良さを決めつけられるようなシステムではない。

つまり、現代社会で未来の人を育て上げるための教育機関ですら、誤った評価基準で成績を決めつけ、頭の良さを判断している。頭がいいということはそれほど単純明快なものでない。

では次に、学校ではない他の基準を見てみよう。富、名声、力など、教育機関を卒業し

た後に社会人として成功の基準となるものはどうだろう？経済的成功、影響力、これらを多く持っている人たち、果たして彼らは「頭がいい」のだろうか？確かに、億万長者になろうと、総理大臣になろうと、それなりの知能を用いた戦略が必要だろう。社会、そしてマジョリティを理解した上での成功だ。しかし、これも頭がいいとは言えない。社会的影響力も、経済的裕福も、馬鹿だって手に入る。YouTubeやTikTokなど、ＳＮＳのプラットフォームの現状を見ればよい。マジョリティをわかっているだけで、それは知能に比例する能力ではない。ほんの少しの策略と運で手に入るものだ。

私が思う本当の「頭の良さ」ーそれは柔軟性、好奇心、そして創造力のコンビネーションだと思う。一つ抜けていても成り立たない。その三つを持った人こそ、本当に頭がいいと思う。歴史も過去の失敗も、それだけを知っていては何も役に立たない。既存している情

報も、その使い方を知っていても、頭は良くない。その知識を持った上で、現代社会に迫り来る問題、いや、自身に迫り来る課題に対して柔軟であり、答えを導き出す創造力とその向こう側を想定する想像力、そして更なる最適解に迫ることができる好奇心こそ、物事を解決できる「頭の良さ」だと思う。伝統や慣習に執着すると、自然に時間と流れ込むプロブレムを一生超えることができない。それと同じように、頭の良さは伝統に執着してしまってはいけない。次へと進む姿勢こそが、頭の良さではないのだろうか？世界最大規模の会社、グーグルを例にとれば、社員に最も必要な要素は好奇心、柔軟性、そして想像力だと語る。

私はここで何を伝えたいのか？学校のシステムを変えるべきという忠告か？いや、そうとは限らない。ただ、人々に頭の良さの基準について、深く考えてほしいのである。我々は常に何らかの難題を解決しなければならな

い。戦争、食糧難、貧困、自然問題などなど。人類が本当に効率よく、ディストピアではない理想の世界を作るのなら、今一度新しく、本当の「頭の良さ」について考え直すべきだ。

私の部屋の壁

W校　高等部二年一組
是永　真凛

まっさらな壁が四方から私を見つめていた。

「ねえママ、私、部屋の壁を青く塗って欲しいの。青が一番好きな色なの。」

小学校を卒業して、七年生に入る夏休み。私のリクエストに応えて、両親は私の部屋の壁塗りをする、ビックプロジェクトを立てていた。私がサマーキャンプに行っている間に、私の部屋は薄い水色にペイントされていた。部屋に一歩踏み入れると、まだ塗りたてのペンキの匂いがする。私はその部屋の床に座り込んで、部屋を囲む、画鋲ひとつ刺さっていない水色の壁を見つめていた。まっさらな壁を見つめながら、頭の中はずっと一つのことばかり考えていた。

「この壁に一番最初に飾るのは何がいいんだろう。」

まっさらな、何もないこの水色の壁に、一番最初に飾るのに相応しいもの。自分の好きなようにして良いのだ。十二歳の私にとって、この最初の選択が私の部屋の未来の鍵を握っていた。しばらく考えた後、私が手にしたのは、私が三年生の時から持っていたサルバドール・ダリの”ライオン”の絵だった。

その絵画を初めて見たのは、ダリ美術館でだった。その絵を見た瞬間に、シンプルなライオンのスケッチの絵が、三年生の私の心を捉えて離さなかった。ダリの有名な溶けている時計や歪な姿の人などの絵が並んでいる中で、ライオンのスケッチは、唯一私が怖くなかった絵だった。この唯一気に入った絵をなんとか手に入れたいと、美術館のギフトショップで、ダリのたくさんの絵が並んでいる中で、私はその絵が見つかるまで一生懸命探した。やっと見つけた時は、宝物を見つけた気分になった。パパにおねだりをして、私は手に入れた宝物のライオンの絵を抱きしめて、

こんな素敵な絵を手に入れることのできた自分の幸運さに満足しながら美術館を後にした。

もし、ダリがこの”ライオン”の絵に人生の重大な意味を含めていて、こんな小さな子供がその重大な意味なんかを見抜いていた、なんていう話だと、なんて私は凄いんだろう、という話になるのだが、残念ながらそうではなかった。この絵にはどんな意味があるのだろう、と調べ始めた時に、インターネットで見つけた情報は、この絵画の背景に人生の意味を見つけようとしていた子供にとっては、単純で残酷な事実だった。この絵はダリの絵のコレクターである、ステファン・ライオン氏という人のために描いたものだった。ライオン氏のためのシンプルで、美しくて、荘厳なライオンのスケッチ。もし今、私がこの美術館にもう一度行ったとしたら、絵画の隣にある説明のプレートをじっくりと読んで、ゆっくりと絵画を眺めて館内を見て回るだろ

う。そして、燃えるキリンの絵に第二次世界大戦の前夜に起こるような破滅の表現を読み取ったかもしれない。でも、私がそこに行った時は、ギフトショップでパパにライオンの絵を買ってくれるようにお願いした小学三年生だったのだ。そして、もちろん、このお気に入りの絵は、私の真新しい水色の壁に掛けられた最初の絵になったのだ。

思い起こしてみると、この絵画は私がいかに世間知らずで表面的な子供だったかを気づかせてくれる。そして、あれから私がどのくらい成長して変わってきたかということも気づかせてくれる。最初にライオンを飾ってから二、三年は、時計と部屋を装飾する電飾ライト以外壁を飾り立てるものはなかった。でも高校の最終学年に入ろうとする今、改めて壁を見回してみると、ライオンの額縁のまわりには、大好きなシンガーのポスター、友人からの手紙、新聞の切り抜きなど、新しいさまざまな思い出で埋め尽くされている。

私の机の目の前の壁には、ゴッホの星月夜のスタイルのヨセミテのハーフドームのポストカードが貼ってある。この夏、ヨセミテで両親と一緒にハイキングをしながらハーフドームをバックにみんなで写真を撮ったのを思い出す。そのすぐ横には、十一年生の時の英語のクラスで、クラスの友達からもらった”真凛の良いところ”という趣旨で書かれたたくさんのポストイットたち。そして記事を読んでいる時に、笑い転げてしまうほど面白かったニューヨーカーの風刺漫画。たくさんの思い出は、それぞれひとつひとつが替え難く、私の心を和ませてくれる。あのまっさらだった日から、少しずつ集められた様々な思いの全てが、私の部屋の四方の壁に、アルバムのように貼られている。まるで私のこれまでの軌跡が全てここにあるかのようだ。大切な、ずっとこのままにしておきたい、そう思う大好きな空間だ。

でも、ここの部屋を去る日が来るのを私は

知っている。来年、私は大学生になる。この部屋を出て、大学の寮に入り、新しい自分の部屋で、またまっさらな壁が私を待っている。

これからもきっと、私は何度も新しい部屋のドアを開け、そしてまっさらな壁に囲まれる日が来るだろう。その度に、私は新しい壁にたくさんの私の成長と思い出を刻んでいくのだ。これから、どこへ行こうとも。

心の故郷

W校　高等部一年一組
岩崎　莉奈

「ついに帰ってきた、この地に！」

私は夏休みに一時帰国で大阪に滞在し、中学時代の友達と共に母校を訪れた。その日はあいにくの雨模様で、空はどんよりとした雨雲に包まれていたが、久しぶりの母校の訪問に気分が高まって、私の心は快晴だった。

私は駅からバスに乗り、友達との集合場所へ向かった。その集合場所というのは、私が以前住んでいた団地の公園だったのだ。この場所を集合場所にする事を提案してくれたのは同じ団地に住む小学生からの友達だった。きっと私が当時の通学路を通って中学校へ向かえる様に、この場所を集合場所にしてくれたのだろう。私はそんなさりげない気遣いができる友達が大好きだ。

久しぶりに団地を訪れると住んでいた頃に戻ったような気持ちになったが、改装を経て

外観のデザインが変わっていた。懐かしい気持ちと同時に、一年でここまで変わるのか、と変化の速さに驚いた。

「公園の遊具が変わっている。あ、花壇も。」

一人ではしゃいでいたら、友達がやってきた。久しぶりの再会に、私達は抱き合って喜んだ。私たちは中学に向かう前に、公園のベンチに座って少し話をした。先に待ち合わせていた二人の友達は別々の高校に通っており、高校生になってからは会っていなかったので、自分の学校について紹介し合った。一人の友達が通っている私立の学校では体育館にクーラーが完備してあり、エレベーターも自由に使えると言うと、公立高校に通っている友達は「ズルすぎる。うちの学校には、そんなのない！。」

と悔しそうに言って、私達は爆笑した。そんな何気ない会話が、私にとってはとても懐かしく、最高に楽しい時間だった。その後私たちは、いつもの通学路を通って中学に向かっ

たが、私は毎朝ダッシュして学校に向かっていたあの日に戻ったような気がした。

中学校に到着して、私達は他の友達と合流した。私は今回、元吹奏楽部の友達を中学の部室に行く事に誘ったのだが、六人の友達が集まってくれた。皆、高校生活が毎日忙しい中、わざわざ集まってくれて本当に嬉しかった。六人全員集合して中学に入ると、まず職員室に向かった。ノックをして職員室の扉を開けると、個人面談でほとんどの先生がおらず、知っている先生は中二の時の担任の先生ただ一人だった。職員室にいる他の先生は全員知らない先生だった。一瞬、少し寂しい気持ちになったが、元担任の先生が

「おおー懐かしいな！」

と歓迎してくれてほっとした。私は先生に、アメリカでの暮らしを写真と共に紹介した。先生は私がアメリカでなんとか生活できていることを知り、喜んでくれた。私たちが先生に、

「他の先生にも会いたい。」
と言うと、先生は
「四時半ぐらいに個人懇談が終わって先生たちが帰ってくるから、またその時においで。」
と言ってくれたので、私たちは先に吹奏楽の部室に行く事にした。
部室ではちょうど全員で合奏をしていて、その様子を見せてもらった。三年生の部長が先生のように、全パートに的確かつ迅速にアドバイスを伝えている姿を見て、私達はとても驚いた。私たちの時は、指導は全部先生で、生徒が中心になって合奏することはなかったからだ。演奏も、私達がいたときよりも何倍も良くなっていて、後輩の成長ぶりに感動し、その姿が頼もしく感じられた。合奏が終わって休憩時間、私が中二時の中一だった、つまり現在の中三になった後輩に声をかけると、とても嬉しそうな表情で
「来て下さってありがとうございます。」
と言ってくれた。アメリカだと私に敬語を使

ってくる人はいないので、久しぶりの敬語がとても新鮮だった。そしてそれと同時に、日本に中学校に通って部活動をしていた日々が脳裏に鮮明に思い浮かび、そんな日常が一年前は当たり前だったことが、なんだか不思議に感じた。お土産を渡して部室を去る時、後輩は私がお土産として渡したシャープペンを

「部活でおそろいで使えるね。」

と喜んでくれた。そんな姿を見て、私は素晴らしい後輩を持ったな、と感慨深かった。

部室を出ると、ちょうど個人面談を終えた先生方が続々と職員室に戻る時間で、廊下で待っていると多くの懐かしい先生方に会う事ができた。私はアメリカから帰ってきたとは思えないぐらい、日本人らしい格好をしていて、周りの友達に馴染みすぎていたため、最初はどの先生も私に気づかなかった。そして私に気づいた時、どの先生も口を揃えて驚いたようにこう言った。

「全然変わってないね。」

確かに先生方の言う通りである。しかし一体先生方は、私がどのような姿に代わっていることをイメージしていたのか・・・。

私達は先生方と廊下で少し立ち止まって話をした。この中学校は先生と生徒も、先生同士も仲が良く親しみやすい雰囲気なので、久しぶりに会ったのにも関わらず、私達は先生方とも会話が弾んだ。一人の先生がボケて、みんなで全力でツッコむ。そんな普通の会話のやり取りや光景が懐かしく、またとても落ち着く空間だった。

この一日は、私にとって至福の一日であった。友達も先生も後輩も、一年ぶりに会った私のことをちゃんと覚えてくれて、あたたかく歓迎してくれた。皆と話したことや笑ったことは、私の思い出の一ページに刻まれた。やはり母校は私にとって心の故郷であり、安心して戻ってこられる場所だと強く感じた。

夢中になれること

W校　中等部三年一組
福島　圭人

今、僕が夢中になっていることはバレーボールです。今年初めて学校のチームに入ってバレーボールの試合を経験して、どんどんバレーボールの魅力にとりつかれています。

僕がバレーボールに興味をもったのは、数年前、アニメの「ハイキュー！」を見てからです。「ハイキュー！」の主人公は身長が低いのですが、並外れたジャンプ力を武器に活躍していきます。バレーボールは身長が高い人のスポーツだから、僕みたいな身長が低い人はバレーボールには縁がないと思っていたけれど、「ハイキュー！」を見て少し希望が持てる気がしました。だからハイスクールでバレーボールをやってみたいと思ったのです。

ハイスクールのスポーツはトライアウトがあるので、それに合格しないとチームに入るどころか、バレーボールをすることもできま

せん。僕はそれまでバレーボールをしたことがなかったので、トライアウトに合格できるよう、半年間、週に一回バレーボールの練習に通うことにしました。ただ練習に通っていたものの、ほとんど初心者の集まりだったので、本当にこれで大丈夫なのかなと不安でいっぱいでした。

三月の後半になりバレーボールのトライアウトが行われました。ドキドキしながら学校のジムへ行きトライアウトに臨むと、「全員合格」という予想外の結果になり、そのまま練習が始まりました。なんとなく気づいていましたが、僕が住んでいる地域では、バレーボールは圧倒的に女子のスポーツであり、男子のバレーボールはあまり人気がないようです。学校のチームも全員で十六人というギリギリの人数しか集まっていませんでした。それでも、僕はチームに入ってバレーボールができることが嬉しくてたまりませんでした。

チーム練習が始まって、一番背が低い僕は、

リベロというポジションをすることになりました。リベロは守備専門の選手で攻撃に参加することはできません。バレーボールといえばかっこよくアタックを決めることは憧れですが、今の僕にはそれが無理なことは分っています。なので僕は自分に与えられたポジションを頑張ろうと思いました。

二週間ほどのチーム練習の後、リーグ戦が始まり、僕も試合に出ることになりました。初めての公式戦、初めての試合、緊張して思うように体が動かないしミスばかりして、チームに迷惑ばかりかけているなという思いから余計にミスをする、という悪循環でした。バレーボールでは一プレイごとにコート内で輪になって声を掛け合います。最初は慣れなくて、いつも輪に入るのが遅れたりしたし、ミスをした後にその輪に加わるのはとても心苦しい思いもありました。それでもチームの先輩たちはいつも励ましてくれて、誰も責めるようなことは言いませんでした。だからこ

そもっと上手くなりたい、今度こそ上手くレシーブしたいと思いながらプレイをしていました。

シーズン初めのころはチーム全体としてもミスが多く、自滅して負けてしまうことも多かったのですが、試合を重ねていくうちにどんどんチームの力がついていき、初めて勝った時はみんなで喜び合い、チームとしてもさらにいい雰囲気になっていきました。僕は今までこんなに毎日部活というものをした経験がなかったので、毎日がとても楽しくチームメンバーとも仲良くなっていくことが喜びでした。

今シーズンの最終戦は、結果的にコネチカット州の優勝チームとなった高校との試合で、悲しくなるほどの圧倒的なパワーの前に、負けて終わってしまいました。いろんな学校との対戦で、それぞれの学校にとても上手な選手がいることもわかりました。夏休みのバレーボールキャンプではシーズン中に対戦し

たことのある学校の選手とも一緒に練習することができ、バレーボールを通じて学校以外の知り合いも少しだけできました。

僕は今、来シーズンのチームで活躍するために、もっともっと上手くなりたい、チームから信頼される選手になりたいと思っています。そしていつか「あのリベロ、上手いよね」と言われるような選手になれるよう頑張りたいと思っています。

新しい経験

W校　中等部二年一組
パテル　杉浦　玲愛

私は日本の東京生まれです。その一年半後、ロンドンへ引っ越しました。そしてその四年後、アメリカへ引っ越しました。私はこれまで五回の転校を経験しています。だから、新しい友達を作ることには慣れていると思っていたのに、今回はちがいました。

私は、毎年日本へ一時帰国をしています。アメリカの現地校は六月末に終わり、日本の学校は七月の半ばまで授業があります。そのため、日本へ帰ってから、日本の夏休みが始まるまでの二週間半、母が通った学校に体験入学をさせてもらっていました。小学校一年生の時から、西野町小学校という、一学年五十人しかいない学校に通っていました。一年生の初日は、きっと私は緊張していただろうけど、みんなが私を囲んで、たくさんアメリカのことを聞いてくれ、すぐに友達が出来ま

した。それから日本へ帰るたびに、みんな私のことを覚えていてくれて、毎年楽しみにしていた二週間半でした。

二年前、その楽しみが、コロナの影響で消えました。西野町小学校の最後の年に通えなくなってしまいました。毎年会っていた友達にも会えず、もしまた街中で会っても、覚えていてくれるか心配でした。

去年は、幸い日本へ帰ることができました。しかしその頃日本は、ワクチン接種があまり進んでおらず、祖母の離れの家でずっと隔離していました。毎年のように、学校に通うこともまだできず、友達にも一度も会えませんでした。

ようやく今年は、コロナに関するルールが緩まり、母が通っていた中学校に体験入学することになりました。今まで通っていた西野町小学校以外に三校集まってできた、鶴城中学校という学校です。毎年一回しか会わない、一学年五十人のクラスメイトから、一学年三

百人以上の中学校に入っていくのはとても緊張しました。また、中学一年生を飛ばして、二年生で入っていくので、すでにみんなは仲の良い友達同士で、グループが出来ている可能性があり、そうなると話しかけにくいと思うので、新しい友達ができるか心配でした。その上、私は補習校に通っていますが、やはり日本の同級生と比べると、日本語の使い方があまり上手ではなく、間違えて変なことを言ってしまうのではないかと思うと、学校に行くのが少し怖くなりました。

学校初日は、朝の会が始まる時に先生と一緒に教室に入りました。私が教室に入った瞬間、三十人以上もいるクラスの全員が私に注目し、手が震えるくらい緊張しました。その上、みんなの前で自己紹介をしないといけないと思うと心臓のドキドキが止まりませんでした。

授業と授業の間は、十分しかなく、クラスのみんなは次の時間の準備をしていました。

私は、みんなのように、各教科のノートなどが無いので、ただ席で待つことしかできませんでした。私が予想した通り、みんな自分の準備が終わったら、仲の良い友達のところに行きました。私は、仲の良い友達はクラスにいなかったので、誰とも話せず、一人だけ席に座ったままでした。一人の休み時間は退屈で、一人ぼっちでいることが嫌でした。

次の日からは、学校へ本を持っていき、休み時間には本を読んで、一人ぼっちなところを見せないようにしました。前の日みたいに、何かをやっているフリをしなくて良くなり、嫌な気持ちは少しなくなりましたが、楽しくありませんでした。そんな日が四日間続きました。

学校に行って五日目、私はプールの授業を見学していました。見学をしている生徒の中で、小学校の時に仲の良かった友達の友達が、話しかけてくれました。最初は、会話がすぐに終わってしまい、話が続かなかったけれど、

最後の方は、たくさん話せたので嬉しかったです。ラインを交換し、その日から、毎日休み時間に話をするようになりました。ようやくクラスの子達と馴染めたような気がし、学校に行くのが楽しくなりました。

今回のこの経験を通して、新しいことに挑戦しても、毎回最初からうまくいくわけではないと気付きました。勇気を出して、自分から話しかけていれば、もっと早く話せる友達ができて、学校生活を最初から楽しめたのではないかと思います。私は九月から高校生になり、また環境が変わります。日本でした同じような思いを、アメリカでも経験するかもしれません。今回のように、ただ周りが話しかけてくれるのを待つのではなく、自ら話しかけて友達を作っていきたいと思いました。

もうすぐだ！やっとだ！

W校初等部六年一組
西山　実里

「もうすぐだ！」

もうすぐ日本に着く。三年ぶりの日本。何しようかな。どこ行こうかな。おじいちゃんとおばあちゃんと何しようかな。楽しみだな。

もうすぐあの人達に会える。

「やっとだ！」

やっと日本に着いた。早く明日にならないかな。楽しみにしてたディズニーシーに行ける。何に乗ろうかな。何があるかな。もうすぐあの人達に会える。

「おはよう！」

楽しみだな、ディズニーシー。何時にあの人達に会えるかな。

「あっ！来た！」

やっとあの人達が来た。何乗ろうかな。

「ジェットコースター乗ろうよ！」あの人が

言って「みんなも「いいよ」と言ったので、乗りたい人は、「インディージョーンズ」という「ジェットコースターと「レイジングスピリッツ」という「ジェットコースターに乗りました。あの人達と遊ぶのはとっても楽しかったです。

「あー、もう夜だ。帰らないと」。

帰りたくないな。でも、

「バイバイ！また、金曜日にね！」

あの人達に会えた。

「今日は、くら寿司だ！」

楽みだな。ネタの種類はどれくらいあるかな。ゲームでは、何個あたりが出るかな。原宿の竹下通りでは何をしようかな。楽しみなことが沢山あるな。

「あーおいしかった」。

また来れたらいいな。原宿の竹下通りもすごく楽しかった。

「品川の水族館いみだな」。

いるかのショー楽しみだな。ペンギンはいる

かな。クラゲは、どれぐらいいるかな。

「楽しかったな」

いるかのショーも見られたし、クラゲもペンギンもいた。また来られたらいいな。明日はまたあの人達に会える。スカイツリーにも行ける。

「スカイツリー楽しみだな」。

久しぶりのスカイツリー何があるかな。昔あったお店、今もまだあるかな。

「LOFTまた行きたいな」。

LOFTには、欲しい物が沢山あった。あの人達には何時に会えるかな。

「あっ！来た！あの人だ」。

「六時ぐらいかな。今は、五時だからスパイファミリーとか見て待つ？」

「あの人は何時に来る？」

また会えた。あの人達の一人だ。

「う人」

スパイファミリーは初めて見たけどすごく面白かった。

「あっ！帰って来た！おかえり。」

「今日どこでねる？」

「そこうへん？」

「オーケー」

今日は、久しぶりのお泊まり。「あの人達」とは、ジャカルタとシンガポールでよく遊んだり、お泊まりをした。お泊まりはとても楽しかった。次「あの人達」に会えるのはいつかな。

「どんな家に住んでるのかな？」

今日は、ジャカルタの時に一緒だった友達の家に遊びに行かせてもらう。家は、どんな感じかな。最近産まれた女の子は可愛いかな。

「楽しかった」

みんな大きくなって、最近産まれた女の子はとっても可愛いかった。

「今日は、おじいちゃんとおばあちゃんに久しぶりに会える。」

三年ぶりに会えるからとっても楽しみ。久しぶりに新幹線にも乗れる。おばあちゃん、お

じいちゃん、お母さんのお姉ちゃん、いとこと何しようかな。昔みたいに大縄とドッジボールやりたいな。

「ついた！おじいちゃんどこにいるかな。」

「いた！」

三年ぶりに会えた。

「おじいちゃんだ！」

「ついた、ついた、家だ。」

おばあちゃんに会える。今日の夜には、お母さんのお姉ちゃん。二十七日と八月二日には、いとこに会える。何しようかな。楽しみだな。

やっとみんなに会えるな。

私の将来の夢

W校初等部五年二組
武田　結万

私はお料理をする事が好きです。最近はりゾットやパンケーキなど自分でレシピ本を見て作ることにとてもワクワクし、楽しいのです。特にスイーツを作る事に最も興味があるので、いま私の将来の夢はスイーツを作ってデコレートをするパティシエになることです。パティシエになりたい理由は二つあります。

一つ目は、作った料理にアレンジをしたり、飾り付けをしたりするのが私の趣味なので、この仕事が向いていると思います。二つ目の理由は、心を込めて作ったお菓子やケーキをお客さんや家族に美味しく食べてもらえるからです。きっとパティシエを目指す途中で失敗をすることもあるだろうけれど、また同じ間違いをしないように気をつけて、料理の技術を上達させていきたいです。

私がスイーツの中で作ることが一番好きな

ものは、ケーキとクッキーです。ケーキは順番を守って一つ一つ丁寧に作ると、思っていた通りに出来上がるので、その達成感が私は大好きなのです。クッキー作りは、生地を一生懸命にこねて、型を抜いて、トッピングをしてオーブンにいれたら、出来上がるまで待ちます。その時間、いい香りがしてきて、クッキーが上手に出来るか心がドキドキしますが、うまく出来たら心がホッ トして、とてもスッキリした気持ちになります。

私の大きな夢は世界のセレブリティーが集まるパーティーに出されるような豪華なケーキを作ることです。そのようなパティシエになるには、フランスの難しいお菓子の専門学校や大学へ行って、有名なパティシエがいるお店で働き、修業をして、自分の目指すゴールまで努力をしなければなりません。

私の家の近くにフランスのお菓子を作っているケーキ屋さんがあります。そこで作っているお菓子のアレンジがとても個性的で、初

20×20

めて見た時とても感動しました。ケーキの上にのっているお花のお菓子はとても細かく作ってあり、クリームもカルフルで、人気の映画ハリー・ポッターや、子供向けアニメのパウパトロールをテーマにした誕生日ケーキも、オーダーすると特別に作ってもらえます。ハロウィンやクリスマスのホリデイなどにはお店は風船やお花でおしゃれに飾られます。朝早くに開店するのですが、盛りだくさんのデニッシュやパイがケースいっぱいに飾られていて、「すごいなぁ・・・」と私は憧れています。

私は有名なセレブリティーのためにスイーツを作るだけではなく、自分の住んでいる街の人達のためにも作ってあげたいです。将来の練習のために、今のうちに色々なお菓子を作れるようになって、人がたくさん通るところなどでベイクセールをしてみたいです。大人になったら、私のお菓子を広めるために世界を旅して、味見をしてもらいます。私のお

20×20

菓子は、甘過ぎて健康に良くない物ではなく、オーガニックの果物や食材を使ってヘルシーな物を目指したいです。

たくさんの人のためには作れないかもしれないけれど、美味しいお菓子を通して何か人のためになりたいです。これからも、私の将来の大きな夢を達成出来るように、色々なレシピを発見していきたいです。目指せ、世界一のパティシエ！

20×20

生け花は花の宇宙

W校初等部五年二組
瀬来　真弥

生け花は、花や枝や葉等を美しく飾る芸術で、日本の文化です。生け花は約七百年も前に始まったそうです。生け花を学ぶためには、生け花教室に習いに行き、上達するまでには数年もかかるそうです。日本には、四季それぞれ、美しい草木が育ちます。だから色々な花や枝や葉を使う生け花の文化が育ったそうです。

夏休みに日本に行った時、祖母が私を生け花教室に連れて行ってくれました。祖母は、私に生け花の楽しさを体験させてあげたかったそうです。祖母の習っている生け花教室は、池坊（いけのぼう）と言うスタイルです。これは、日本で一番古い流派だそうです。

祖母の先生は九十才以上のおばあさんで祖母とは五十年ぐらい友達だそうです。先生は、孫を連れて来てくれたので、とてもよろこん

でいました。だけど私は、何十年でも生け花をしてもあきないのかな、と不思議に思いました。

祖母や他の生徒さんたちは色んな花を紙に包んで持って来てくれていました。テーブルに着いたら、先生が赤い花器と水を吸い込んだ、花をつきさす緑色のスポンジを準備してくれました。それから、先生が、

「好きな花を取って来なさい」。

と言いました。私は、ダリア、トルコキキョウ、姫ひまわり、こばん草、かすみ草と、キャッツアイと言う花を選びました。

次は、いよいよ私の生け花体験の始まりです。先生が、

「好きなように、花をスポンジにつきさして下さいね」。

と言いました。私は、どんなふうにつきさせばいいかが分からなかったので、好きな色の花を集めてつきさすことにしました。好きな花は、青とむらさき、白の花でした。好きな

花を長く切って、真ん中から広がるようにさしました。そうしたら、先生が来てこう言いました。

「この大きい赤いダリアを真ん中にさしたらいいよ。」

と言って、ダリアを私のさしていた花のど真ん中にさしました。これは、イメージより少しちがうな、と私はちょっとムッとしました。花は、花のままで美しいのにならべ方を、変えても美しさがそれほどいえるとは思えません。私は、前の青とむらさきと白の花だけですてきだったのに、と感じました。先生は、好きなようにやってもいいよ、と言ったのにこれではぜんぜん自由ではありません。

ダリアがどうしてもいやだったので、先生が私からはなれた時、ぬき取ってみました。それから、大きな赤いダリアの変わりに小さくて黄色い姫ひまわりをさしてみました。私の好きな青、むらさき、白と黄色だけですっきりしました。それから、どんどん好きなよ

うに花をさしてみました。気分よく続けていたらまた、先生が来ました。

「あらあら、ダリアはどうしちゃったの。赤い花が真ん中にあった方がいいよ。」

と先生が言いました。先生がもう一回ダリアを真ん中にさしました。それから、ピンク色の花をさして、前のめりにさし直しました。私の頭がこんらんしました。どうして大きな赤い花を真ん中にさした方がいいのでしょう。どうして前のめりにさした方がいいのでしょう。私はぜんぜん分かりませんでした。その後に私の生け花がよく進みませんでした。先生がまた来て私の席にすわって、私の生け花の全体を直してくれました。

先生の生け花を見てびっくりしました。なぜなら、ちりばめられた花が私に語りかけているように見えたからです。大きな赤いダリアが、花全体をまとめているように見えました。こばん草とかすみ草が外に向かって広がりました。

先生の生け花は、まるで絵のようでした。先生の生け花には、小さな宇宙があるとも思いました。

最初に、私は生け花は、花をスポンジにさすだけだと思っていました。だけど、最後には、生け花は絵であり、小さな宇宙がそこにあることが分かりました。また、この先生にもどって、生け花についてもっと学びたいと思いました。

20×20

お姉さん

W校　四年一組
千田　愛真

私は夏休みにお姉さんになりました。日本に三年ぶりに行って、三才下のいとこのことおばあちゃんの家ですごしたからです。

いとこの名前はなっちゃんと言って、小学一年生の女の子です。ひさしぶりに会ったのでうれしくて、おもちゃで遊んだり、ビーズのブレスレットを一しょに作ったりしました。夜は花火をして、一しょの部屋でねてとても楽しかったです。

いとこが家に帰った時、お別れがさみしい気持ちもあったけれど、ほ

16×16

「とした気持ちもありました。おばあちゃんから、

「えまちゃん、なっちゃんにやさしくしてくれてありがとう。なっちゃんとてもよろこんでいたね。

と言われて急につかれた気持ちになりました。それはなっちゃんがやりたいと言うことは自分がやりたくなくてもしょにやっていたからです。例えば、朝テレビを見た時に、私にはつまらないと思う番組をしょに見なくてはならなかったり、ほしいと思う物をゆずったりしました。

なかなか会えないいとこだからやさしくしたいし、楽しくすごしたいけれど、ずっとゆずったり、自分の

やりたいことが出来ない年上のお姉さんをするのはつらいな、と思いました。お母さんにその気持ちを話したら、

「えまちゃんがんばったね。お兄ちゃんがやさしいってわかったかな。」

と言われました。

私ははっとしてお兄ちゃんはいつもこういう感じで私がやりたいことを一しょにやってくれているのかな、と思いました。そして、今度からはお兄ちゃんも何がやりたいか聞いて二人とも楽しめることをしようと思いました。

来年の夏も日本に行けたら、なっちゃんと遊ぶ時は私の気持ちも話し

て、一しょに楽しくすごしたいです。

16×16

大切な命

W校初等部三年二組
真鍋和也

今年の夏、ぼくは北海道のあさひ山動物園に行きました。ぼくは、朝からたくさんの動物を見ることに、ドキドキしていました。

ぼくは、レッサーパンダが木を登っているすがたや、ペンギンが魚を食べているのや、フクロウがとび回っているのを見るのが大好きでした。

でも、感動したのは、あざらしとヘビでした。

あざらし館では、大きな円柱水そうがありました。あざらしが円柱水そうで上から下まで泳ぐのを見て、

とても楽しそうでした。すると、だれかが

「見て！あざらしの赤ちゃんだ。」

と言いました。ぼくはそれを聞いてどうくつまどで、水そうの中をのぞきました。よく見ると、あざらしの赤ちゃんがぼくの方を見ていました。ぼくは思わずさけびそうになりました。ぼくは、円柱水そうの中で、あざらしの赤ちゃんといっしょに泳いで遊びたい気分でした。

もう一つ大きく心にのこった動物館は、ヘビです。ぼくがは虫るい館を出ると、しいく員さんがみんなにヘビを見せていました。そして

「今からみなさんにヘビをさわって

もらいます。

としいく員さんが言いました。ぼくはヘビ年生まれなのに、ヘビをさわったことがないです。なので、さわってみることにしました。さわってみると、思っていたよりぬるぬるせずすべすべしていました。それからしいく員さんが、おどろくことを言いました。

「これからヘビがネズミを食べるところを見てもらいます。」

「そんなのかわいそうだよ。」

と、だれかが言いましたっでもみんながしずかになるとしいく員さんは、

「動物はおたがい食べないと生きていけません。これはしぜんのことで

す。

と言ってネズミを持ってきました。

ヘビとネズミをかごに入れると、ヘビはだんだん近づいて、にやりとネズミをしめはじめました。そして、ネズミがだんだん息苦しくなっていくように見えました。やがてヘビはるようにのみこみはじめました。ぼくは、すごく気持ち悪くなって、ネズミがかわいそうだと思いました。でも、これはしぜんの中では、あたりまえの出来事だとしいく員さんから教わりました。

ともだちこくなものを見てぼくはショックでした。

ぼくはヘビがネズミを食べるのは

知りたくありません。ぼくは他の動物もきけんだと思いました。でもぼくは、人間もずんこくだと思います。だってぼくたちは牛やぶた、鳥という動物を食べています。でも、人間や動物は肉を食べないと生きていけません。大切な命をぼくたちは、むだにしてはいけないと強く思いました。

思い出たくさんランドセル

W校　三年一組

パテル杉浦　有愛

ランドセルは、たくさん色があって、デザインもかわいいです。キーホルダーやカバーを付けて、自分らしくかざり付けもできます。そんなランドセルに、私はずっとあこがれていました。私の姉たちは、毎年夏に日本に行くとランドセルをしょって小学校に通います。小さかった私も、「いつかランドセルをしょいたいな。」と思っていました。やっと一年生になって、学校に行けると思ったら、コロナが広がってしまい行けませんでした。私は、今三年生です。

16×16

今年は、待ちに待った日本の小学校に行けることになりました。やっと使えるランドセルをだきしめて、ワクワクが止まりませんでした。でも、不安な事もいっぱいありました。私は、みんなに日本語がまちがっていわらわれるかもしれないし、新しいクラスメイトに何を話せばいいか分からなかったのでとても出来るか心配でした。

学校へ行ってみると、クラスの子たちは色々なことを教えてくれました。私はすごくうれしくて、ホッとしました。同じクラスにおばあちゃんの家の向かいに住んでいる子がいました。家に帰ると、すぐまどを開

16×16

けてお話をしました。よく日は、こんだん会のため学校が半日でした。いっしょに学校に通う班の友だちが遊びにさそってくれました。こんなすぐにさそってもらえると思っていなかったので、すごくうれしかったです。でも、何時にどこで会うのか聞いても、「宿題が終わってからあそこのお寺で。」としか教えてくれなかったので、どうすればいいのかわかりませんでした。「あそこのお寺」てどこだろう。と考えながら近所を歩き回っていたら、なんとか友だちを見つけることができました。日本にいる間に、まだまだ知らない友だち言葉を少しづつ学んでいこうと思い

ました。

学校生活は、はじめてのことがたくさんありました。まずは、きゅう食です。アメリカの学校では、毎日おべんとうを持って行きます。でも、日本では、きゅう食のおばさんたちがおいしいごはんを作ってくれます。みんなの大好物が出た日は、ジャンケンをして勝った人がおかわりをもらえます。私は、一度も勝てません でした。きゅう食の後は、そうじの時間です。私は、毎日ぞうきん がけをしました。ゆかをふくと、ぞうきんが、すうーっと進んで行くのが気持ちよかったです。その後おばあちゃんの家もぞうきんがけをして、ピ

カピカにしてあげました。アメリカの学校では、そうじの時間がないのご自分の家にもどったら、ぞうきんがけをたくさんしたいです。

毎日たくさんの友だちにかこまれて、私はいつもニコニコしていました。だから終業式の日は少しさみしかったです。でも、ランドセルにたくさん思い出をつめて家に帰ってきました。私のランドセル、来年も待っててね。

わたしのたんじょう日

W校二年二組

岡野百花

八月十二日にわたしのたんじょう日会をしました。はじめてたくさんともだちをよんでがんなちゃんとごうどうでしました。わたしは、おもいきってアメリカ人をよんでみました。なまえはリリーです。なぜリリーをよんでみたかというと、

リリーは、リリーのたんじょう日によんでくれたからです。

わたしのたんじょう日会では、スーパーボールすくい、しゃてき、うちわづくりをしました。なかでもたのしかったのは、スーパーボールすくいです。なぜかというとスーパーボールのがらがかわいいし、たくさんすくえたからです。

わたしがいちばんうれしかったのは、リリーが「ベストタイムエバー」といってくれたことと、みんなといっしょにゆかたをきたことです。

ぜんぶすごくたのしかったです。さいしょはリリーがきてくれるかどうか、どきどきしたけれどだんだんリリーとコミニケーションがとれておおもしろくなってて

きました。すごくたのしかったのでまたらいねんもともだちとたんじょう日会をしたいです。

12×12

ぼくのバスケット

W校二年二組
伊村勇人

きのうバスケットのならいごとへ行きました。バスケットをはじめたきっかけは、きょ年のサマーキャンプでなかよくなった、いつしくんといっしょにしたらとても楽しかったからです。

しかしいつしくんは、ほかのしゅうへひっこしてしまいました。

まいました。　ともかなしかったです。でもいつしくんのおわかれ会で、ぼくはバスケットをつづけるから、はなれていてもバスケットをつづけようね。とやくそくしました。

いつしくんがいなくなった後のれんしゅうは、あまり楽しくありませんでした。

なぜかと言うと、いつしくんとやっていたバスケット

は、あそんでいるかんかくがでしたが、そのかんかくがなくなってしまったからです。

その後、し合でボールがまわってこなかったり、ぼくの父に「れんしゅうしないならやめちまえ。」と言われました。でもしかたなく、そのセッションをつづけました。その時にぼくの母がスラムダンクというアニメ

をすすめてくれたり、学校に毎日バスケットボールをもってきてくれました。そのれをつづけていると、バスケットがうまくなってきてまた楽しくなってきました。

その楽しさは、むかしいさとは、少しちがいます。前は友だちとやっていることが楽しかったけれど、今はれんしゅうすればするほ

12×12

どできることがふえてきて、うまくなるコツが分かるようになってきたので楽しいです。

さいきんは、し合で点を入れられるようになりました。これからこの百ばい上手になって、もっともっとし合でかつやくしたいです。

しゅくだいやらないと

W校一年一くみ

ふかさわ　せお

ぼくは、しゅくだいやるのがいやです。なぜなら、大すきなゲームをやるじかんがなくなるからです。ぼくがすきなことは、ゲームをすることです。テレビゲームやアイパッド、かるたやオセロ、いろんなしゃるのゲームがすきです。

12×12

だけど、一年生になってからルールができました。

そのルールは、しゅくだいをおわらせないと、ぼくのすきなことができないことです。

ぼくのしゅくだいはほしゅう校とえいごの校です。

どっちもまい日やりますが、でも、まい日なんまいやってもぜんぜんおわりません。

ぼくはおかあさんや先生がぼくにゲーム

すいかんをなくすいいわるだとおもっていました。

でも、なつに日本にかえったとき、なんでもよめるようになっていました。ゲームもかんばんも、字がなんてかいてあるかわかってよむのがおもしろかったです。

だいすきなゲームがかんたんにできるようになるから、しゅくだいをがんばろうとおもいました。

しゅく

だいをはやくおわらせて
たくさん日本ごがわかるよ
うにしゅくだいやらない
と、とおもいました。

12×12